が判然たる週期年とはいえないものが見受けられる．

次に同一緯度の上層と地上の年較差の長期変動の比較では，例えば宮崎と温泉岳，阿蘇山を比較してみると，変化傾向は上層と殆んど類似しているが，振幅変化は温泉岳は宮崎と殆んど同じであるが阿蘇山は大きい．いいかえると 1000 m 以下では地下では地上と同じであるが 1000 m 以上は大きく，1945年よりの減少率および 1950 年よりの上昇率は上層の方が遥かに大きい．

大阪と伊吹山とを比較してみると変化傾向は類似しているが振幅変化は上層の方が大きく，伊吹山と東京では変化傾向，振幅変化も殆んど同じである．

次に東京と筑波山を比較してみると．変化傾向は1914年迄は東京と筑波山は反対であるが1914年以降は類似である．然し1904～1938年迄の振幅変化は上層の方が大きく，高山とでは1914年迄は変化傾向は筑波山と同様に反対であるが1914年以降は類似である．又振幅変化も1936～1946年までは上層の方が大きいが他は殆んど同じである．

次に松本と比較してみると，1924年までは変化傾向は反対であるが，1924年以降は類似しており，振幅変化も936 ～1946年までは上層の方が大きいが他は殆んど同じ
1

である．

次に 5 ケ年平均値の偏差を第5表に示してあるが，この表をみてもうかがえる如く．上層でも緯度および高度により偏差状況がことなる事が知られると思う．又太陽黒点数と上層の 5 ケ年平均偏差曲線を比較してみると，1921～1925年と1941～1960年の 6 ケ年平均値は，緯度および高度の如何に拘らずいずれも逆相関であり，他の 5 ケ年平均値は正の相関である．

今迄地上および上層の気温年較差の長期変動と太陽黒点数との関係を調べて来たが，この傾向が続くとするなら，長期予報上のよき目安となると思う．

即ち1958年の黒点数の最大期はたしかに暖冬であり，特に昭和34年は異常暖冬であった．然し昭和38年より寒冬の入りとなり，年々寒冬もきびしくなると共に暑夏ともなり，1968年頃はかなり寒冬又は暑夏のきびしい年であろうと思う．

然し乍らこの様な相関が実在するかどうか不確実であるので，かるはずみな予想を立てる事はつつしまなくてはならない．本論では太陽活動と気温の年較差の間の関係について一つの推測を行なうにとどめ，その当否の検討は将来の研究にまつことにしたい．

理　事　会　だ　よ　り

第22回　常任理事会議事録

日　時　昭和39年4月6日　17.30～21.00

場　所　神田学士会館

出席者　正野理事長，畠山，吉武，楼庭，増田，岸保，松本，神山，村上，今井各理事，鈴木委員（順序不同）

決　議

1. 藤原先生夫人へ藤原賞メダル一個贈呈する．
2. 大会関係
   イ．決算　3月末の分は未決の所があるが全体として了承した．
   ロ．予算案　人件費60万円については 2，3 の理事から増額し事務局確立に使ったらとの要望が出されたが，運営については次期理事会にまかす．
   ハ．大会運営　本庁理事で準備を進める．
   ニ．大会の座長および特別講演を次のようにお願いする．

		第1会場	第2会場
20日	午前	村上多喜雄	関原　彊
〃	午後	松本　誠一	清水　逸郎
		奥田　穣	北川信一郎
21日	午前	渡辺　次雄	
22日	午前	竹内　清秀	小林　禎作
	午後	関川　俊男	小野　晃
		矢野　直	藤原　美幸

特別講演　藤田哲也（衛星気象学の近況について）

3. 長期計画に関する件

アンケートのうちで目ぼしいものを松本理事が大会で報告し，大学連合の長期計画案(大気物理研究所)の報告もする．

4. その他
   イ．来年度学会の時期場所について関西支部と協議する．
   ロ．研究グループ懇談会よりの申し入れは次回に討議する．